

発刊によせて

二〇一一年三月一日、福島では地震・津波だけでなく、東京電力福島原発メルトダウン事故が発生。七年目を迎えた今も、復興は手探りが続いています。

当法人は、二〇一一年夏には、子供たちの放射能リスクを少しでも下げするため、県外への保養事業を民間・行政に企画提案して実施。さまざまな受けとめ方がある中、何を優先的に何から始めていくのか・・・等、ますます協働の力が試され続けています。正確な情報が伝わらなかつたこともあり、多くの方々は疑心暗鬼になり、混乱も生じました。二〇一二年には、里山がつこう施設内に「里山放射能測定室」を開設。放射性物質汚染を測定し、見える化も進めました。

二〇一六年九月から居場所交流サロン「伊達もんもの家」を開設。自主避難から帰還された伊達・県北地方のお母さん方の力をお借りして、このたび「避難体験記録」を発行する運びとなりました。大人十四人の切々たる想いと決断が綴られています。重い心を持ち上げ、辛い体験を綴ってくれたこの体験記録は、これからどれ程の方々を励ますか計り知れません。投稿された皆様に深く御礼申し上げます。

特定非営利活動法人　りょうぜん里山がつこう

代表理事　高野　金助

私達家族が東日本大震災をきっかけに山形市への避難を決めたのは、震災後三ヶ月経過した頃でした。頻繁に続く余震に過敏に反応しつつ過ごしていた時期です。福島に居続けて大丈夫なのか悩む事はあっても、何が正しいのか判断に困っていませんでした。原発付近に住む友人が県外の親戚を頼る理由も、私はあまり深く考えていませんでした。なぜなら、私自身原発に対する知識など無かったからです。福島県に原発がある事は、昔学校で習いました。しかし、電力の大量供給や経済効果を發揮する点など、長所が短所を上回る内容だったように記憶していません。震災後に毎日報道される発電所内の処理状況を見て、危険な状態にある自分の環境が不安になりました。

そんなある日、夫の友人が山形へ自主避難を決めた事を知り、このきっかけに運命を感じました。勿論不安はありましたが、多忙な仕事の合間を縫って協力してくれた夫のお陰で事はスムーズに進みました。山形の不動産会社で提案された物件が消えていくスピードが速く、このとき感じた焦りは忘れられません。

無事に引越しを終え、荷解きと不慣れな環境での育児に追われ、あつという間に夏が終わりました。知合いも居ない、土地勘も無い、話せる人が居ない、それだけで、人はこんなに臆病になるものなのだ、初めて知りませんでした。夜泣きをする娘と一緒に泣いてしまったり、精神的に疲れていたのだと思います。でも、避難中の人を対象に開催されるままカフェへの参加が、とても安心につながり

ました。会場内にいる福島のお母さん方は、皆同じ想いで避難してきてきているんだ、と思うと元気が出てきました。その後山形での避難者支援イベント等に積極的に参加し、自然とお友達も増えました。地区の民生委員さんも優しく相談に乗ってくれたり、町内会長さんが避難者同士の交流会を開いてくれたり、避難生活中の支えは、近所に住んでいた避難ママ達との助け合いだったと思います。一人じゃないんだ、と共感出来る度、心が強くなり私も娘も笑顔が増えました。夫も職場から避難生活について温かく見守られ、週末以外にも高速道路で福島の職場に通勤するなど、出来る限り家族で過ごす時間を増やしてくれていました。やがて、辛くなってきたら福島に暫く帰るという自分なりの元氣回復法を繰り返し、念願の第二子を授かりました。でも、悪阻や切迫早産で入院を繰り返して、福島の実家と山形の往復回数が増してしまい精神的にも肉体的にも、とても負担でした。このまま福島に戻ろうかと何度も悩みましたが、やはり福島で乳児を育てる事に抵抗があり、出産後は再び山形での生活に戻りました。

しかし、戻ってきた頃は、町内に住んでいた避難者の数は激減していて、寂しい現実と向き合いました。帰還の時期は人それぞれの選択です。そんな状況でも、娘が幼稚園に通うようになり、違った意味での忙しさ・楽しさを見つけられるようになりました。「いつ戻ろうか？」この話になると、答えも出ず重たい雰囲気になり始めたのも、この時期です。マイホームが完成したのに住んでいないという無言の重圧もありました。慣れ親しんだ山形を去り難いという感情が生まれていて、頭では分かっているけど、割り切れなかつたからです。

でも、家を建てた場所で一生暮らしていく事、子供たちの学区は幼稚園から中学校ま

で一貫している事などを考え、三年半の山形避難生活を終えて平成二十七年三月に、娘の入園に合わせて帰還を決めました。

山形の生活を振り返ると、大変な事は沢山ありました。家族と離れて過ごした事、訪問販売がしつこかった事、高速道路で事故にあった事、自分が病院に行けない辛さ、子供の入院、雪深い山形で子供をおんぶしながらの雪掻き、血豆の登場にはびっくりしました。運転中の路上スリップも思い出したくありません。でも、山形に避難出来たからこそ、出会えた友人の多さに驚きます。子供のためにと始めて始めた避難生活でしたが、私の大切な財産となりました。避難生活は夫がずっと味方でいてくれたからこそ成り立ったのだと信じています。

帰還後も原発事故がもたらした被害は今後の私達の生活と密接な関係を持ち共存し続けます。行政の動向に疑問を持って、自分一人の力では解決できません。帰還したことを後悔しないように、定期保養や空間・土壌の線量測定、食品の安全性等、自分なりの基準を持って生活しています。震災で知らない事の恐ろしさを体験したからこそ、これからは、先に帰還した仲間が提供してくれる情報も大事にして、家族のために色々な知識を身につけ暮らしたいと思えます。

避難生活を通して

S・S

平成二十三年三月十一日、東日本大震災。あれから、五年の月日が過ぎた。五年、私にはあつという間の日々だった。

私の避難生活の始まりは、三月十四日。長男がお腹に宿ったばかりの初期妊婦だった。福島市自宅は、水道・ガスが止まった状態。震災後、実家（山形県鶴岡市）の母とやっと電話が繋がると、実家はライフラインが使えるとのこと。当時二歳になったばかりの娘と初期妊婦の私の体を気遣い、母が「とりあえず落ち着くまで鶴岡へおいで。」

と、十四日に兄の迎えで鶴岡へ帰った。当時は、まさか、この日が避難生活のスタートだとは思ってもいなかった。なぜなら、ライフラインが復旧したら帰るつもりでいたからだ。主人の仕事の都合で四月は休みが取れないということ、ゴールデンウィークに迎えに来ると約束。迎えたゴールデンウィーク。主人は鶴岡には来たものの、一緒に帰るといふ話はなくなった。帰れなくなった理由は、大きな大きな社会問題となった原発事故の放射能問題。放射能は、小さな子どもたちに将来、悪影響を及ぼすかもしれないということ、主人も私も、考えに考えた結果、お腹の子が無事に産まれるまで鶴岡で、私と娘は過ごした方がよいと決断した。私たちだけ避難し、主人は福島。果たしてこれでよかったのだろうか、未だに考えることがある。可愛い盛りの子の二歳の娘の成長を主人と見守れない。主人が帰宅すると笑顔で迎えてくれた娘。避難したこと、主人は、

二歳からの娘の成長過程を間近に見ることができなくなってしまった。主人にとっては、家族との時間を引き離されてしまったのだ。主人の仕事の休みの都合上、鶴岡に会いに来れるのは、月に一度の土曜日のみ。高速を利用して約三時間。往復六時間。月曜からは仕事の為、日曜の三時くらいには帰らなくてはいけなかった。主人が会いに来て帰るまでの三人の時間はとても貴重な時間。楽しい時間はあっという間に過ぎ、主人は福島へ戻る時間。この時間が辛かった。見ていて、とても切なく怒りさえ覚えた。原発事故さえなかったら、家族みんなが暮らせていたのに：と。主人が帰るため、車に乗ろうとすると、娘は涙。

「いかないで。やだ。やだ。ばばとばいばい、やだ。」

と、泣き叫ぶ。そんな娘を見ながら、主人も辛そうに車を走らせる。走らせると必死に娘は追いかけて追いかけて、車が見えなくなるまで、泣きながら手を振っていた。まだ二歳の娘にとって、なぜ、パパと一緒にいけないのか、理解することは難しかった。私も、主人も辛かった。かわいそうな思いをさせていると：。この時点での家族離れ離れの生活のピリオドは見えず：。

しかし、このまま、家族離れ離れの生活を続けるのは、三人にとってよくないと分かっていた。それでも、当時は福島へ戻るといふ考えは私の中にはなかった。主人と少しでも距離が縮まるようにと、山形市の借り上げ住宅に住むことを決断。福島市―山形市は、高速道路を利用して、約一時間。何かあったら、すぐに駆けつけられる距離。長男が生まれ、一ヶ月検診を終えた十一月、山形市へと引っ越した。会社の配慮で月二回、休みが取れることになる。とてもありがたかった。会える時間が長くなり、娘はとても

嬉しそうだった。山形で二歳の娘と〇歳の息子との三人での生活。まだ、幼い二人の育児を一人ですることは、とても大変だった。正直、息詰まってしまうような時もあった。そんな中、避難している親子が集まれる場を設立するため、避難中のママへの求人募集、保育士募集との情報が目に止まる。日中三人で過ごす毎日、大人と話したいという思いがあり、子連れで働くことを決断。働くことで育児ばかりの生活から開放された気持ちと、子どもたちも他のスタッフと関わり合えたりと嬉しそうで私にとっても子どもたちにとっても良い環境だった。避難生活、同じ悩みを持った人と関わることも大切だと感じた。

避難生活が二年半が過ぎようとしていた頃、新しい命がお腹に宿る。それも双子の命。嬉しいはずの妊娠なのに、双子と知った時は不安で不安でたまらなかった。避難先で、それも一人で、四人の子どもたちを育てることができなのか不安だった。双子妊娠なので、安静にするように言われ、実家で産むことを決断。双子出産までの五ヶ月間は鶴岡での生活となった。

避難生活が長くなると、主人と意見が合わなくなる時が多々あった。震災直後は「避難していた方がいい。」と言ってくれていたのに、一年、また一年経つごとに、「もう、大丈夫じゃないかな？そろそろ福島に戻ろう。」という考えに変わってしまいました。家族が離れ離れで、主人がさみしいのもわかり、辛かったが、まだまだ幼い子どもたちのことを考えるとすぐに、「うん。」とはうなづけなかった。

しかし、二〇一五年三月に避難生活の終わりを迎える。きっかけは息子と娘の入園・入学があったこと。学校に上がってしまうと転校させたくないという思いがあり、そう

なると山形市で入学を考えると福島へ戻るタイミングがつかめず、ずっと、山形市在住になつてしまふ。ということ、主人が仕事を辞めなければ、ずっと家族バラバラの状態。考へに考へた末、帰還を決断。

約四年の避難生活。あつという間に過ぎた。当時二歳の一人娘が、六歳に。私は、避難中三人の子宝に恵まれ、四人の母に。私にとっては、一人で四人の命を必至に守ろうと、日々育児に追われてあつという間だったが、主人にとっては、長い長い四年間だったろうと思う。子どもたちと過ごせず、成長過程も見れず、一番かわいい時期の子どもたちの姿が見られず、寂しい思いをさせてしまった。原発事故さえなかったら、家族一緒に暮らせたのに。四年分の家族の貴重な時間をこれから取り戻していきたい。娘。息子にとっては、まだ山形での生活の記憶が濃く、山形へ行くと懐かしさを覚え、第二のふるさとになっている。

震災時の停電と断水、余震のストレスから私は帯状疱疹で高熱を出し、長女は寒さで風邪を引いていた。見かねた福島市の実家の姉が、親戚のいる栃木県宇都宮市への避難を勧めてくれる。避難は三月十八日。

当時はガソリンが不足しており、姉が一台分のガソリンを用意して、私と姉、夫と子ども二人を連れて宇都宮へ。福島県民への差別があるとの情報があり、二本松の県北保健所にて全員でスクリーニング検査を受け、異常なしの証明を受ける。高速道路が分断していた為、国道を通りガソリンがギリギリの状態です。宇都宮では、通常通り電気が使え、コンビニやスーパーの物資も福島ほどは不足していないのに驚いた。宇都宮での避難生活は長男の幼稚園入園式前日迄。四月七日からは、長男を伊達市の幼稚園に入園させ、日常生活を送る。

しかし、放射線への不安から、自主避難者を受け入れている静岡県伊東市への再避難を決定。残していく夫の両親に土下座して再避難を伝える。

五月十八日、二人の子供を連れ、新幹線で静岡に出発、母子避難を開始した。福島ではずっとマスクをして長袖、長ズボンで過ごしていたので、新幹線で東京に着く頃、ようやくマスクを取り、ほっとしたのを記憶している。新幹線の中で、二人の子供を見て「お母さんと旅行良いね。何処に行くの」と話しかけてきた年配の女性に、「福島から避難してきた」と話すととても当惑していた。福島の場合は知られていないと実感した。

当初は短期避難を考えていたが、除染が進まない福島の状態と長男の教育を考え、六月から伊東市の幼稚園転入を決める。幼稚園では、避難して来たことを率直に伝えていたので、周囲のお母さん達が、幼稚園用品や子供達の着替え、生活用品などを提供してくれ、とても助かった。

夏休み中は、福島から沢山の自主避難の母子が伊東市を訪れ、様々なイベントや意見交換会等も行われた。夏休みが終わると、自主避難の母子の殆どは福島に帰還。ペンションでの避難生活から、借り上げ住宅への切り替え要請があり、九月から民間アパートを借り上げる避難を開始する。

避難生活を開始したばかりの頃は、毎日何をして過ごしたらいいのか、いつ帰るのかという子供の間にどう答えたらいいのか分からず戸惑っていたが、息子の転入を機に日常生活に追われるようになる。

避難先の静岡は遠く、夫と会えるのは二、三ヶ月に一回。深夜に福島を出発した夫が早朝に静岡に着き、その日の深夜に福島に帰る事が多かった。

一歳半の娘は、たまにしか会えない父親の姿に当惑し、会う度に泣いた。まだ言葉少ない娘と夫は好きな音楽を聴いて心を通わせていた。成長した娘は、早朝部屋の鍵が開く音に必ず目を覚まし、「パパどうしているの？」と不思議そうな顔をした。

息子は幼稚園の運動会の応援に夫と両家の祖父母達が来た時、満面の笑みを見せた。私の両親は、孫達を心配して毎月会いに来ていたが、夫の両親が来たのは初めてで、皆でアパートに泊まり、息子の四歳の誕生日を祝福した。翌日、皆が福島に帰るのを見送る時、息子は怒りと悲しみで泣き入りひきつけを起こした。なだめた祖母が渡したチョコ

コレートを地面に叩き付け、「こんなのいらぬ！」と泣き叫ぶ息子の姿に皆が涙した。子供達の将来を考え、放射線の心配のない当たり前の日常をとと思った避難生活が、子供達に父親と祖父母の不在という非日常を過ごさせている矛盾に私は気付かされた。

朝起きると父親がいないことに慣れた息子は、父親が残した煙草の空箱のにおいを嗅いで「パパのにおいがする」と笑った。そんな息子の姿に私は涙が出た。

子供達にも私にも友人が出来、避難生活に慣れると、福島では出来なかつた裸足で泥んこ遊びをしたり、草花に触れ、虫を捕ったり、川や海で自由に伸び伸びと生活出来る環境が有難く、かけがえのないものに思えた。その反動で福島の放射能汚染の不安や、子供達の将来の健康不安が募った。

借り上げ住宅での生活は不自由が多かつた。上階に住む大家が子供に厳しく、足音や声が五月蠅いと、借り上げ契約更新を渋り、泣いて謝罪し、更新のお願いをした。大家の苦情を避ける為、日中は殆どアパートに戻らず、朝九時に出て、屋外や公民館、子育て支援室などで過ごし、夕方五時に帰宅、夜も七時には子供達を寝かしつける生活だった。いつも子供を三人連れて外で過ごしていたので、家に誘ってくれたり、子供達を可愛がり、子供も参加できるイベントを教えてくれるママ友や、ばあば達の優しさが本当に有難かつた。

息子が小学校に入学する前年、福島に一時帰宅した私達を迎えた義妹は、「もう帰つてくるでしょ？」と当然の様に話した。子供の従兄弟達も「また避難に行くの？」と不思議そうに問うた。福島で生活する人には避難は理解されず、他県の人には避難が当然だと理解される温度差にも悩まされた。

三年間の避難生活で、静岡は私と子供達の第二の故郷になっていた。帰還を決めた時息子は友達との別れを深く悲しんだ。避難当初は、父親や祖父母の不在を悲しんだ息子に、また辛い思いをさせたことを私は今も申し訳なく思っている。

しかしその一方で、避難生活では何でも工夫して楽しんでやってみることに、誰とでも交流して、自分の震災の体験を話すというかけがえのない経験をすることが出来た。子供達を守る為と思えば、私も夫も不自由な二重生活に耐えることが出来たし、人は人、自分は自分という価値観を持つことが出来た。子供達と一緒に美しい自然の中で思いきり遊び、友人達と語らう経験は私達家族にとって本当に得がたい経験であった。避難先で出来た素晴らしい友人達や、お世話になった多くの人々に、私と夫は今も深く感謝している。

私は、生まれも育ちも福島で、進学も就職も結婚も福島だったので、避難して初めて他県に住み、人々と深く交流し、福島の県民性や他県民との違いに気付かされた。

三年間の避難生活が私達家族に与えた影響はとても大きい。震災を契機に、家族の価値観は大きく変わり、毎日元気に生きて生活出来ることを感謝出来る様になった。苦労や悲しみ悩みもあつたが、避難を後悔したことは一度もない。避難体験は私達家族にとって一生の宝物である。

三・一一 原発事故から

A・Y

二〇一一年三月十一日から私達の生活は変わりました。あの日は急に大きな揺れがおそってきました。私は一〇ヶ月の息子、三歳の娘とリビングでおひるねしていました。強い揺れにたえながらテレビが子供達に倒れないように必死に押さえていました。食器棚からはコップや皿がたくさん落ちて割れました。家の中にいるのは危険だと思い少し揺れがおさまったのをみて、外の車へ逃げました。空は天気が見るみる変わり雷や雪になりとてもこわかったです。水道も電気も止まってしまい我が家を離れ福島市の実家へ避難しました。少しの間我慢したらいつもの生活に戻れる。みんなでいれば大丈夫だと思っていました。三月一二日原発が爆発したことがニュースで流れました。それって何だろう？どうしてこんなにさわいでいるのだろうか？訳がわからなかった。避難が必要なのは本当に近くの方なんだ。

十三日埼玉の姉夫婦から電話がありました。早く逃げてきてと。とても危険な所になっっているのか？福島は。主人と両親とも話し合った結果、私と子供達の付き添いで母と姉が同行してくれることになり、埼玉の姉の家を目指しました。約十二時間かけてやっとなついた埼玉は、普通に生活を送る人達であふれていて急に涙が出てきました。主人との別れぎわたくさん言葉をかけたかったけど、次に会えるのはいつだろうとか、会いに来てねとか言っても困らせてしまうんじゃないかと思ひ、「気を付けて」が精いっぱい言葉でした。姉の家にいる間いつまでいたら帰れるだろうと考えていたが、状況は悪

くなるばかりでした。五月、姉たちの引越しについて行き、愛知県へ行きました。知らない土地でどうしたらよいのか何をするにも考えがまとまらず、子供達と楽しく過ごしたくても思うように行動できませんでした。そんな私を支えてくれたのは、二人の姉達でした。水遊びのできる公園に連れていってくれて、バーベキューをしてくれました。ボールあそびや水遊びをして子供達が楽しそうにしていてくれるのを見てやっと、こんなふうに遊んだら良いのだっと思いつき出すことができました。主人とは毎日電話をしました。子供の事や福島の事を毎日毎日話し会えない時間をうめたいと思っていました。そんな中福島の人達が近くの県へ移り住んでいるという話を聞き、すぐに行動へうつしました。空いているアパートは一軒しかありませんでした。すぐにそこへ決めて、九月中旬に山形県へ行きました。ここならば主人とも会いやすいし実家も一時間半でつく。迷っている時間はありませんでした。娘は何回も転園して最初は幼稚園へ行くと私から離れませんでしたが、すぐに慣れてお友達がたくさんできました。息子は私からまったく離れませんでしたが、週に一度主人が来るといつもひざに座ってごはんを食べていました。普通の家族での食事がとっても温かくなる時で、福島に帰ってしまう時にはさみしくなってしまう週末でした。山形でも温かい人達に恵まれてとても良くして頂き、普通に楽しめるようになりました。

二年半後に三番目の子供の妊娠が分かりました。山形で二人の子供達との生活もかなり大変だったので、三番目がうまれてからも山形で育てていく自信はなく、福島へ帰る事が決まりました。帰ってくるのも不安で福島で子供達を守れるのか？線量は？家の中はどうかだろうか？食べ物？水は？そんな事を考えて気がおかしくなりそうでした。伊

達市へ戻ってからは周りの方に放射性物質の話をしてもいいのか悪いのか、避難という形で逃げた自分が福島でがんばって生活していた方にしてもいいものか分かりませんでした。データを調べるとやはり自宅の庭は高い数値でした。これでは子供が触ってしまい、内部被ばくしてしまう。虫や自然が好きで何でも触ってしまう子供達です。除染を望みましたが、伊達市の政策では叶いませんでした。そんな中で、私の支えになってくれたのは、同じく避難から福島県へ戻った友達でした。悩みを聞いたり話したり、お茶を飲んだりそれだけでとても心が落ち着きました。本当に感謝しています。みなさんと情報交換をして少しずつ問題の解決に取り組みました。水はウォーターサーバー、食料はより低い測定値の所のものを買って、外遊びは除染がしてある公園を利用。残念ながら子供達は次第に大好きなお散歩はあまり行かなくなりました。庭も自主除染し、きれいな土にしました。

そうして三・一一からやっと五年。伊達市に帰ってから二年半が過ぎ、ようやくここまでの道のりを歩んで来られました。長い長い五年間。書いていると同時に当時がよみがえりますが、詳しく書けません。言葉にできないほど辛かったです。少し取り戻したものはありますが、ここは安全なのか？という不安はいつまでも消える事はないと思います。これからはずっと……。それでもここで生きていきます。

避難生活を経験して

J・A

震災当時、私は夫と息子の三人で福島市に居住していました。息子は十二月に産まれたばかりの、三ヶ月に満たない赤ちゃんでした。家は二〇〇八年に購入した中古住宅で、花や木を植え、手入れをしながら暮らしていました。福島で生まれ育ち、福島の人と結婚し、福島に家を買って、おだやかな毎日が続いていくものだと思っていました。

しかし、あの事故によって、私は三年半の避難生活を送ることになりました。事故後すぐ逃げるように言ってきたのは夫の母である義母でした。お願いだから逃げて、と泣いて電話をよこしたと聞き、これはただごとではないと思い、すぐ荷物をまとめました。夫は小さな頃から、原発に何かあったらすぐに雨合羽を着て、遠い土地に逃げるんだよと教えられてきたそうです。お互い同じ福島市で育ちましたが、私は原発のことなんて学校でちょっと習ったぐらいで、普段から原発や放射能について話す機会はありませんでした。多分、福島市に住むほとんどの人がそうだったのではないかと思います。十二日のうちに私たちは福島から離れ、関東方面に向かいました。栃木のホテルで一泊し、翌日は東京の伯母の家へ、十四日には伯母たちと一緒に愛知県まで逃げました。愛知に一週間ほど滞在し、そこからまた東京に戻りました。夫は仕事に戻りたい、と福島へ帰りました。福島にいる職場の同僚たちは、炊き出しのボランティアや復興作業に追われていたのです。

見知らぬ町で一人で子育てするというのは大変なストレスがかかりました。一緒に暮らせる方法がないか何度も話し合いましたが、息子を守り育てていくには夫の収入が頼りでした。そこで義母が、山形市で一緒に暮らさないかと、提案してくれたのです。山形市なら福島まで一時間半、東京よりはずっといいと、四月半ばに山形のアパートに移り住むことになりました。山形での暮らしは、とても充実していたと思います。いろんな場所に行き、散歩や公園にもたくさん行きましました。同じ避難者の仲間とつながり、当事者団体として活動したこともありましました。そこで出会った仲間たちとは、今も友人としての付き合いが続いています。義母とも震災前よりずっと仲良くなれたと思います。

山形で暮らしたことは、私の財産です。しかし、避難をいつ終えるのか、福島に帰るのか、違う場所でやり直すのか、夫とは幾度となく話し合い続けていましました。そして、二〇一三年、娘が産まれました。息子は二歳半になっていましました。子育てがより一層大変になると同時に、子どもたちがどんどん成長していくことに、私は焦りました。

月に二・三度、夫は福島から来て子どもたちとの時間を作っていました。福島へ帰る夫を見送るたび、子どもたちを悲しませていると突きつけられているような思いがしました。夫はいつも最高の父親で、家事も育児も率先して担ってくれる良き夫でしたので、不在時のギャップはなかなか埋まるものではありませんでした。その冬に娘が肺炎になり入院したことも、大きな出来事でした。子どもたちが、風邪をひくたび責任の重さに潰されそうになっていき、ついに限界を迎えました。

それから徐々に帰還に向けて準備を始めました。自宅は事故後に測った放射線量の高さがシヨックで、とても住む気にはなれず、既に売却していました。夫の職場が伊達市にあったため、家族の時間を増やせるようにと、伊達市周辺で物件を探すことにしました。伊達市は県内でもいち早く除染を進めていたので、行政にも信頼がおけると考えていました。

そして、二〇一四年十一月、伊達市内の賃貸住宅へ移り住み、家族四人での暮らしが始まりました。食べ物や放射線についての考え方は、山形にいた間に少しずつ変化していきました。避けられるなら避けたほうがいい、まずは測ったデータを知って対処する、ということに落ち着きました。山形でも、数ベクレルのものは出ていましたし、おいしく食べたほうがいい、と少しなら食べていました。細かく測定してくれる民間団体に頼み、家周辺の放射線量を記録し、高い場所には近づかないようにしました。その後、伊達市で除染が徹底されなかったことは非常に残念でしたが、気をつけながら暮らしていくことはできると判断しました。もちろん、これからきちんと除染の必要性が考え直され、Cエリアが除染されることを期待しています。

現在は伊達市内に新しく造成された土地を購入し、家を建て、やっと一から再スタートすることができました。ニュータウンは線量が低く、小学校も近いので、できる限りのリスクは減らせたと思って暮らしています。息子は六歳、娘は三歳になり、私も仕事をもって忙しくなりましたが、夫と支え合いながら子育てを楽しんでいます。避難を経験して一番良かったことは、迷いながらも自分で考えて選択をし、常に主体性を持って生きられるようになったことです。原発のこと、地域や子育てのこと、政

治のこと、それらは自分自身の生活に直結しています。
これからも広くものごとを見て考えて、より良く生きられるように行動していき
いと思っと思っています。そして、大切なことをきちんと言葉にして、子どもたちに伝えて
いきたいです。

避難体験記

K・T

私が自主避難を考えたきっかけは、妊娠でした。妊娠が分かったのは東日本大震災から約一年後。平成二十四年二月でした。

私の親しい友人達は地元に残り子育てをしている人が多かったので、最初は避難せず福島で産み育てようと思っていました。でも主人の勧めで避難する事を決めました。様々な情報がある中で正しい情報を見極められなかった私達は「福島に居ても大丈夫かもしれないが、もしも、もしも、生まれてくる子どもに放射能の影響で何かあったら悔やんでも悔やみきれない。」という思いで、今出来る限りのことをしようと相談して決めた答えでした。幸い、まだ支援の手を差しのべてくれる自治体もあり、赤十字からの家電の援助も受けられたので、ありがたくお世話になることにしました。

なぜか避難に対してさほど不安がなかった私。妊娠四ヶ月の時に一人で新潟へ行くことを決めました。学生が初めて一人暮らしをするようなワクワクする気持ちだったように思います。新潟には親戚が居る訳でも、友人が居る訳でもなく、土地勘もなく、全く新しい場所でした。情報を得るために美容院に行き、お薦めの病院などをリサーチしました。引越しの片付けなどやる必要があるうちは夢中で毎日が過ぎましたが、生活が落ち着いてくると誰とも会話をしない日が苦痛になってきました。実家の母や夫と電話で話すだけの日々。月に一度は福島に帰り、妊娠中でしたが自分で運転して新潟・福島間を行ったり来たりして息抜きしていました。

でも、避難して三ヶ月が経った頃、ストレスが溜まり主人と話しているうちに涙がふれ出しました。

「お腹の子への影響を考えると福島へ戻るのは不安。でも、一人で避難生活を過ごすのも辛い。」

自分の気持ちを言葉にすると少しすっきりしました。でも、

「そんなに辛いなら少し早めに福島に戻って、里帰り出産の準備をしたら？」

という主人の提案もあり八月中旬に福島に一時帰省しました。(出産は里帰りと決めていました。)

十月に出産しましたが、十二月中旬まで実家で過ごしました。そして十二月十七日から新潟での母子避難生活がスタートしました。最初は実家の母が新潟に来て側にいてくれました。その間に避難者の交流施設であるフリップハウスを訪れてみました。そこは福島県から避難しているママ達が自由に集い、情報交換したり悩みを話せたりする場所でした。早くここを訪れていたら、私のストレスはもう少し軽かったかも！と思いました。皆さんが温かく私を迎えてくれ、いろいろ教えてくれたおかげで、母子生活を楽しくスタートすることができました。子供がいることで、ベビーマッサージやベビ योग、ベビータンクスなど、親子で行ける所へ足を運ぶことができたので、そこでも友達ができました。福島から自主避難で来ていることを話すと、みんな

「困った時は言ってね。」

「具合悪い時は、買い物とかしてあげるからね。」

と、声をかけてくれ、頼れる人が近くにいない私にとっては心強い限りでした。不動産

屋さんも大家さんもいい方で、丁寧に対応してくれたので、新潟の生活は特に不満はありませんでした。

しかし、家族バラバラの生活への不満が少しずつ出てきました。福島に残っている主人は、どんな生活をしているのかな？大丈夫かな？と毎日電話で確認する日々。特に話したいことがある訳でもないが、電話をしないと不安。でも話すことは特にないという日もあって、一緒に生活していればこんなことないのに・・・と思うようになりました。そして、息子を一人で育てている状態なので、自分が体調を崩すわけにはいかないというプレッシャーもありました。

二年が経った頃、私の精神状態が母子生活に耐えられなくなり、一度福島に戻って家族で生活し気持ちの充電をしようということ、新潟の借上住宅を引きあげ福島に戻ることにしました。その時は、私の気持ちが安定したらまた他県へ避難することも考えていました。自宅は福島市内でも線量の高めの場所なので自宅へ戻るのではなく県内の借上住宅を借りて生活することに決めました。福島に戻って約二年になります。でも、まだ自宅には戻れていません。住む場所が定まらないフワフワした感じの生活がまだ続いています。

息子は四歳になりました。母子で新潟にいたことも現在福島で家族と生活できていることも息子にとってはベストな環境だったと思っています。原発事故さえなければ、こんなに遠回りせず家族の幸せな日々が送れたのに、思い描いていた生活が送れたのに・・・という悔しい思いは消せませんが。住み慣れた福島はやはり居心地がよく、今は再び母子避難をする気持ちにはなれません。福島のどこで、どのような生活をするのかが、私

の今後の課題です。残りの人生、悔いのないように過ごしていきたいと思っています。

震災後の五年間

T・Y

震災時

平成二十三年三月、看護師として働いていた私は夜勤明けで一息ついてアパートの自宅でテレビを見ていました。こたつでほっこりして見ていたテレビで「ぐいーんぐいーん」何だろ胸がわさわさした瞬間、地震がおきました。外に出ると、電線がわさわさ揺れ、裏山はカラスたちが飛び立って不気味な雰囲気、ただ事じゃないことを感じました。仕事に出かけていた夫のことも心配でしたが、職場の病院に急ぎました。私が働いていた整形外科病棟は電気もつかず、壁にはひびが入って混乱している様子でした。これからどうなるのだろう：と思いつつ、帰ってきた自宅は電気も通り、水が出ない程度の不便さ、夫も水の確保に走ってくれて、どうにかなるとの思いもありました。当日、翌日：と職場に足を運ぶ毎日、あまり、テレビを見ていなかっただけ、浜通り側であった大きな被害も福島第一原発事故に関して、なんだか他人事のように：テレビで印象的だったのはCMがすべて「ACU」になっていたこと。私自身、放射能に関する意識も低く、新婚だった私は夫と外に散歩に出かけて、「いや、人ほんと少ないね！」と、喋っていたほどでした。今振り返ると考えものですが：。

北海道へ

震災の前年に、夫の実家である北海道に行くことが決まっております、三月末には仕事を

退職し五月には引越しをする予定でした。同時期に母が乳がんを患い、闘病中だったため、私自身は、健康に心配がある母たちを置いて北海道に行きたくない気持ちでいっぱいでした。そんな時に、あの震災と原発事故：仕事を退職して家にいる時間も増え、時間が経つにつれて、テレビなどでの被害の状況も情報として入ってくるようになり、「こんな中、自分たちだけ地元を離れるのは申し訳ない、親たちがいるのに：。正直、混乱の中、北海道行きがなくならないかな」という思いでいました。

しかし、それをよそに北海道行きの準備は進んでいきました。退職して家にいた中、実家にいつつも、じつとはしてられず、ボランティアに行ったり、人に会ったり、引越に向けて福島での生活を悔いのないようにしていました。今振り返り、後悔していることは、助産師としてもっと何かできたのではないかと、ということ。震災当初は看護師として働いていましたが、その前後は助産師として働いていました。お母さんや赤ちゃんの状況や災害時に活動していた先輩助産師たちの話を聞くと、私は何をしていたんだろう：と思うことが多々ありました。

福島への思い

地元への思いとともに、震災があつた年の五月に夫と北海道に。フェリーで向かう私たち夫婦を、両親が港で見送ってくれました。北海道では、新しい生活が待っていました。（北海道に行くまでには、「避難ですか？」と何度か聞かれました。正直、避難ではないので「違います。」と答えていました。内心、「避難じゃないよ、もう、北海道行きたくないよ」でした。）行くからは楽しい生活を！と思つたのですが、曇りのない天気がいざばらく続いたからか：福島から出たくなかった気持ちがあつたからか：、知り

合いがない土地で、出かけても何となく疎外感を感じ、天気のように気持ちはずんやり。これではまずい、と仕事を始めた矢先に子どもを授かり、そこからまた以前のよう
に外に行く機会も増えていきました。思わぬ妊娠にうきうきしながら、新しい生活に楽し
みを見つけて生活も徐々に落ち着いてきました。でも、事あるごとに一日の話をして
いたりすると「福島に帰りたねえ」と言っていました。(夫はどう思っていたのかな
：)

なんやかんやで、震災の翌年の四月に北海道で無事に出産し、子育て開始！妊娠中に
できたママ友たちの支えもあり、人並みの悩みはありましたが息子を授かったことで、
生活がいい方向に向かってきた気がします。福島の家族にも報告し、その年のお盆に帰
省の運びとなりました。すると口は達者でややぶっくりしていた母が、激やせしていま
した。パワフルだった母が乳がんの病魔に侵されてきていたのです。数日滞在して元気
な様子もみせてくれましたが、私達を迎える準備なども大変だったろうと思います。

秋になり、母の病気が悪化し再発、入院を繰り返すようになりました。何かできる
ことがあったわけではなかったのですが、母の近くに、何か手助けしたいと思いちよう
ど育休だったため、息子と一緒に福島の実家で、過ごすことになりました。毎日息子と
一緒に病院に通う日々。何するわけでもなく、息子と一緒に病院に行き、持っていた
お弁当と一緒に食べる、おしゃべりして帰る。それでも、後悔はしたくないと思ひ(夫
の理解もあり)、年越しも福島で過ごしました。

環境が変わったのもあり、息子は泣くことが多かったと思います。実家を出て何年も
たっていたので、生活の使い勝手も違って、初めての子育てをする中で疲れもあり

私もげっさりしていました。

母の病状は、少しずつ悪化し、一月の末に息を引き取りました。母はどんな思いだったのか、図りしれませんが私は少しでもそばに居られて良かったと思っています。のちに、父から聞いたのですが、私たち夫婦がフェリーに乗り北海道に向かう際、帰り道に気の強い母が泣いていたこと、なかなかフェリーが出た港から離れなかったことを知りました。そして、実家に父ひとりになったこともあり、福島に帰ることを本気で考えるきっかけになりました。

福島へ

震災から三年経った春、夫と息子とともに福島に帰ってきました。北海道の義理の両親とはいざごきはありましたが：

帰ってきたものの、子どもが居るからか、やっぱり原発事故の影響は気になりました。離れていたせいもありわからないことも多く、生活する上でも遊ばせる上でも放射能の心配がありました。帰ってきた当初は、家の周りの線量を測ったり、洗濯物が気になったり：いつも不安でした。でも、色々な方にお話を聞いたり、教えてもらった勉強会に参加したりして、今では放射能の不安はなく暮らせていると思います。今は楽しく過ごすが一番大切だと思っっています。笑って過ごして、なるべくストレスなく！母は退職したら、ゆっくり好きなきことをして暮らしたいと、知り合いや友人に話していたようです。でも、退職目前で、亡くなってしまいました。頑張っ働いてくれていました。もっと生きたくっただろう、と思います。私は母から教えて

もらった気がします。「今を楽しく生きて」と。私は明日死んでしまっても後悔のないように毎日生きているつもりです。失敗もあるし、思うようにいかないこともありすが、それも人生。八割楽しければ合格かな。

今楽しいと思うのは、息子と一緒に笑って過ごす時間、仕事で助産師としてお母さんと赤ちゃんたちに触れ合っているとき。子育ての中でいろいろと考えることもあるし、子どもに教えてもらうことがたくさんあります。そして仕事で関わるお母さんと赤ちゃんもいろいろなことを教えてくれます。

震災があつて五年間、ここに書いた他にもいろいろ思うことはありました。でも、行くのが嫌だった北海道でしたが、北海道に行つたおかげで息子を授かることができました。また、子育てを通して、たくさんの人に出会うことができました。今では北海道に行つて良かったと思つています。そして、いま、大好きな人たちが居る、この福島（保原）で生活できて幸せです。

三月十一日、私たち家族には小さな奇跡が起こりました。

あの日、私たちが住む福島から主人と九ヶ月の息子と三人で義父母の住む埼玉のアパートへ遊びに出発。そして、そちらで被災しました。二日後に主人は仕事があるため福島へ帰り、息子二人と義父母宅での避難生活が始まりました。そこからしばらくの間は何もかもが夢のことのようにしか思えません。予想したことの無い現実を受け入れることができなかったのです。ニュースから流れてくる地震と津波の映像。たくさん人の死と残された家族。そして原発。日々、色々と分かってくる新たな現実。心がついていけません。育休中だった私は、六月からの仕事復帰が決まっていました。「ただちに健康への被害はありません。」この言葉が頭をグルグル回り、幼い息子を連れて福島へ帰っていいのかという不安は大きくなっていきました。しかし、人手が足りない中、福島で頑張っている会社の人のことを思うと、帰らないという選択はできませんでした。

私たちは生きています。大丈夫。自分に言い聞かせ二ヶ月半後、福島へ戻ることを決めました。福島での生活が始まってみると原発への不安は増すばかりでした。なかなか息子とお散歩にも行けないという現実。お部屋の中ばかりも子どもにはストレスだなと思つて、たまにはいいよねと外に出ると、ニコニコしながらタンポポを見つけ触れようとする息子の姿を素直に喜ぶ事ができませんでした。福島でのこんな現実が繰り返され、

主人とどこで生活したらいいのか何度も話し合いました。息子の未来のために、後悔しないために、埼玉の義父母のところへ息子と二人で避難する事を決めました。福島へ戻って三ヶ月でした。

辞めようと思っていた仕事は、埼玉の店舗に配属してもらい、九月から働きながらの避難となりました。義父母に助けてもらいながらの恵まれた避難生活のはず：でも夜になると涙が溢れてきました。幼い息子のためにと何度も話し合って決めたことだけど、この選択が本当に正しいのか悩む日々がつづきました。埼玉での二ヶ月半の避難から、福島へ戻り大好きな保育園の先生と大好きなパパとすごした三ヶ月。九月から埼玉での新たな保育園生活：。そして、パパのいない生活。一歳の子どもにとってこんなにもめまぐるしく環境を変えてしまった事に、申し訳なささと悲しさでいっぱいでした。でもここで暮らすと決めたからには！と自分に喝を入れながら暮らしていました。二週間おきに福島から来てくれるパパとの再会が何より頑張る力になりました。そして、子どもと一緒に通勤していた電車の中でもたくさんのお優しさに触れ、はげまされました。福島で生まれ育ったというご婦人との出会いもありました。そのご婦人は私の出身地を聞き、今の現状が分かれると初めて会ったにもかかわらず

「辛かったね。寂しかったね。」

と泣いてくれました。私も思わずポロリ。こんな素敵な人たちがいっぱい。ここでもやっついていけると私たちにたくさんのパワーをくれました。そしてそんな生活が半年ほど過ぎた頃、二人目妊娠が分かりました。出産するにあたって戻ることも考えましたが、ネットなどの情報を集めた結果、埼玉で産むと決めました。妊娠九ヶ月頃には仕事も辞め

ました。

そして無事に男の子を出産。男の子二人の子育てが始まると、パパと一緒にあ、と思う事が増えていきました。二週間に一度来てくれるパパと会うのも、嬉しい反面、別れがとても辛くて……。そうしているうちに私の体調が崩れていきました。食欲が無く、どんどん痩せてしまったのです。

私たちは生きていくのだからと踏ん張っていたものの、身体は正直でした。何のために避難しているのか、子供たちにどんな人生を送ってほしいのか、何のために生きているのか、改めて考えるきっかけとなりました。ただ生きるために生きているんじゃないよなあ。子どもたちには大好きな人と大好きな事を見つけて、どんな時でもいい方法を見つけて楽しく生きてほしい。そのために今必要なものはパパと一緒に家族四人で暮らす事。未来への不安を数えるのではなく、今自分たちにできるいい方法を探して、小さな幸せを沢山見つけて生きていきたい。いろいろな情報や思いで不安や悩みがゼロになったわけでは無いけれど、何処に暮らすとも変わる事のない私たちなりの答えを見つけました。震災、原発事故で失ったこともたくさんあったけれど、その分たくさん出会いと気づきを私たちにくれました。限りある資源の事。五年経った今でも私たちの事を思って助けてくれ、安全な食べもの、生きる意味を教えてください。大切な人が遠くにもたくさんいるということ。そして、共に悩み、励まし合い、ありのままを受け入れ合う福島の仲間ができたこと。本当に大切なものをこの震災で気がつくことができず。これを無駄にしないためにも、今自分たちにできる限りある資源を大切にしたい。大切な人を大切にしたい。すべてに感謝して生きていきたいと思えます。まだまだ不安や不

満を数えてばかりのときもたくさんあるけれど、自分にできる事をしながら今ある幸せをたくさん感じて生きていきたいです。

平成二十四年八月、私と息子の避難生活が始まった。事故から既に一年五ヶ月後のことだ。事故当時、私は就労していた。任されている仕事が多くあったので、仕事を辞めて避難することは出来ないだろうと考えていた。

でも、二歳五ヶ月の息子の被曝は避けたいため、細心の注意を払い生活していた。休みの日はできるだけ県外へ出かけ、食料品などの買い物や公園で息子を遊ばせていた。とにかく、夫も私も必死で息子を守っていた。そんな生活を続けていたある日の夜、夫は私に県外へ母子避難することを決断させた。約半年も続けていたこの生活から解放されるんだと、安堵した。でも、家族が離れて暮らすことへの不安も大きかった。避難することを決めたものの、借上げ住宅の空きがなかった。また、仕事の引継ぎも思うように進まず時間がかかったが、その目処が経った頃、山形県で借上げ住宅入居者の再募集が始まった。私たちは、行き来のしやすい山形市を希望し、その後まもなく、そこへの避難が決まった。

山形で生活を始めた時、息子は三歳十一ヶ月。まずは息子を幼稚園に入れ、教育を受けさせることを考えた。アパートの目の前にある公園で毎日のように走り回る息子。大好きな砂遊びや虫取り、何でも出来る。当たり前前のことを当たり前のように出来ることに、心から幸せを感じた。夫は、私たち家族が住んでいた梁川町の自宅に一人で生活していた。週末はできるだけ家族一緒に過ごそうと話し合い、夫も私も梁川と山形を行き

来していた。

でも、父親と離れて暮らす幼い息子の心の中には寂しさが募っていて、束の間の家族の時間に終わりがくると、大きな声で泣きじゃくった。夫のいない時には

「どうしてパパと一緒に居られないの？パパと一緒に居たいよ」

と、何度も私に言っていた。でも、気がつくといつの間にか言わなくなっていた。息子に沢山我慢させていることは、百も承知。幼稚園の長期休みは梁川へ帰り、家族の時間を大切にしたい。山形での生活が落ち着いた頃、私の心が折れた。私の中で積み積もった色々なものが爆発し、この生活を続ける自信もなくなってしまった。やっとの想いで梁川に帰りたい気持ちを打ち明けたが、夫は

「最低でも小学校に入るまでは山形で生活するんだ。」

と言った。全ては息子のため。夫は、心を鬼にして言ったのだと思う。

でも、私が抱えていたことを夫に話せたこと、そして同じ避難ママにも話しを聞いてもらえたことで、重くなっていた心が軽くなった。私は弱い。でも、弱い自分を支えてくれる人が、その心がいっつも傍にすることに気が付き、また頑張れると思った。

息子が年長の時、伊達市避難者相談窓口の仕事に就いた。相談の受付や行政主催の交流会開催などの業務で、月一〇日の勤務だった。息子の小学校就学児健診の通知が届き、夫とどうするかを話し合った。放射能への不安はあるが、家族一緒に暮らすことを選び、帰還することを決めた。息子に

「パパのお家に帰るよ。卒園式が終わってママのお仕事も終わったら帰ろうね。ずっとパパと一緒に居られるからね。」

と話す、表情一つ変えず

「うん。」

とだけ答えた。パパと三人で暮らすことを望んでいるのだから、きっと喜ぶ筈だと想像していたのに、ただただその言葉を冷静に受け止める息子の姿にとっても切なくなつた。この時でさえも、我慢してしまふのかと思つたからだ。帰還することを決めてから、そのことへの不安に駆られ、本当にこれで良いのか悩んでいた。でも、この事があつて、これで良かったのだと、出した答えに自信を持つことが出来た。

平成二十七年三月三十一日。私と息子の避難生活最後の日。いつものように高速に乗り、梁川の自宅へと向かった。「国見」の看板が見えると

「あともう少しでパパの家だよ。」

といつも息子に教えていて、二人にとって目印になっていた。でも、この日は看板が見えた瞬間、これで避難生活が終わるのだ……。そう思い、涙がこぼれた。助手席では息子が寝ているから、涙を見られる心配はなかったが……。次から次と色々な想いがあふれて、涙は止まらず泣きながら高速を降りた。

約二年七ヶ月の避難生活。辛かった思い出が先に浮かび、未だに涙が出る。楽しかった思い出も沢山あるのに……。夫をはじめ、母子避難を支えて下さった沢山の方々のおかげで生活できたことに、心から感謝している。

三月十一日、私は妊娠八ヶ月でした。雪が舞い電気がつかない暗い夜、前の家に石油ストーブがあるから声をかけてもらい、一緒に暖をとっていました。九時過ぎ主人の実家から連絡が来て、義理の母が迎えに来ました。実家は停電にならず、井戸水もあり、安堵しました。テレビが見られたので、津波に原発爆発と信じられない光景に悲しみと不安でいっぱいになりました。どこにも行けず家で遊ぶ子ども達が、兄妹喧嘩をしたり外に行きたがると、主人の両親が「外に行ったら放射能があるから、早く死ぬんだから。」と言ひ聞かせる毎日でした。それを聞いて私も「怖いなあ。これからどうやって生活すればいいのか。」不安が増すばかりでした。八ヶ月のお腹の子に対して「生まれてくる子に罪はないのに、原発事故があつたせいで、将来が心配になつてしまふね。」と義母と共に、今後の生活を考えると本当に怖くなりました。生活は不自由なくさせてもらったのに精神的に辛く、吐いたり、お腹も張って体調が悪くなつてしまいました。

そんな中、二つ上の兄が居る群馬に避難する事が決まりました。先に四つ上の兄家族が行っていて、妹が私と一緒に行ってくれました。福島から避難というとても重い不安を背負って来ているのに、子ども達は大勢のいとこに大喜びで、大はしゃぎでした。でも着いた日の夜に、五歳の娘が嘔吐をして大変でした。何日か後、母と八〇歳過ぎの祖母も避難してくるといふ話になり、唯でさえも大人数で義理の姉家族に迷惑かけているのに冗談じゃないと思ひ、福島に居るように説得しました。私は、子ども達が外遊びを

している姿に嬉しさを感じながらも、母子避難の寂しさ、避難先への気遣いから早く帰りたくてたまりませんでした。一週間後、妹と兄家族が子どもの卒園式のタイミンで福島に戻った時は、本当に辛く、大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせていました。市役所職員で忙しい主人に、早く迎えに来てと、お願いする毎日でした。

「まだ、帰ってこない方が良い。まだ早い。」

と言う主人に、どうして私の気持ちが変わらないのだろうと腹も立ちました。でもその時に、アパートを見つけて生活するという決断が、私にあったら今の生活と全く違っていたなあと思う事があります。義理の姉家族の優しい人柄に、「お腹の子は不幸ではない。何か意味があつて私のお腹にいて震災後に生まれて来る。」と強く感じる事が出来、もし結婚する時に子ども達が福島の子だからと差別を受けても、全力で子ども達を守つてあげようと強い決意を持つことが出来ました。一ヶ月後、主人が迎えに来てくれて、長い長い一ヶ月が終わりました。

戻ってからは、出産準備であつという間に過ぎました。多くのママ友が山形・米沢に借家を無料で借りて、避難、週末保養、長期休暇保養をしている事に、置いて行かれた気分になりながらも時間が過ぎました。夏休みの間は、某NPO団体の保養プログラムで北海道に行きました。生後二か月の子を連れて行く事に不安を感じる暇も無く、この夏休みに福島を離れなくてはと必死でした。保養先では、ホテルの一部屋を用意されていて、私と子ども達だけのスペースがある事が救いでした。二年生の長男は、部屋になんて居たくなく外に行きたい、遊びたい、隣の部屋の子が勝手に部屋に入ってきて騒いでいく。そんな状況に、長男を強い口調で叱る毎日でした。自家用車を持って来て観光

地巡りをして、参加者が信じられませんでした。とにかく、全く楽しむ気持ちの余裕がなく、思い通りにいかないストレスと、怒ってばかりいる自分を責めていました。参加者の多くは、子どもの為に県外避難を最終目的に来ていました。私は県外母子避難の決断が出来ていなかったもので、参加者が集まる場では疎外感を感じました。一ヶ月が過ぎ、主人がフェリー乗り場に迎えに来てくれていた時は、うれしさと共に、これから福島でどう生活していこうかと不安の方が多かったです。でも、子ども達の主人に会えたうれしそうな顔は忘れられません。

帰ってからは、子ども達にはマスクをさせ外出。学校の通学以外はあまり外出させない。外遊びは、週末主人と米沢や猪苗代に行きました。十月に家の前に住んでいた家族が山形に母子避難した時は、「えっ、今さら。」と思いました。が、「やっぱり避難した方が良い。避難出来て羨ましい。」と思い、米沢に貸家を探しに行きましたが、物件はなく、早い行動力が必要だったと痛感しました。

県外避難者対象の支援が多い事に不満があり、避難しないで福島で生活している子ども達の方にもっと手厚く支援して欲しいと思っていました。育成会行事の秋祭りの山車引きがあり、嫌だと思いつつも子どもの参加したい強い気持ちと一緒に付き添って色々触らないように見張るしかありませんでした。子どもの事を思うからこそ、ダメダメばかり言ってしまう自分が嫌でたまりませんでした。

震災から三年後、長男と長女がサッカーのスポーツ少年団に入団し、砂埃が舞う屋外で一生懸命プレーする姿に、もう放射能なんか気にしていられない。ここで生きるしかない。とふっ切れた思いが沸きました。子ども達に、群馬と北海道での思いを聞いたら

「楽しかったよ。また行きたい。」と言ってくれて、肩の荷が下りた感じでした。私の一番支えになったのは、震災後に生まれた次女の存在です。気持ち落ちているも、笑顔にしてもらいました。五年が過ぎても、震災関連のテレビを見ると勝手に涙が出てきます。これから我が子が悲しい思いになる事があるかも知れない。その時は、きちんと向き合って話をしたいと思います。主人が居ないと決断が出来ない私ですが、沢山悩み、一つ一つ決めてきた、その時の選択は間違っていないかと思っと思っています。

震災当時、長女が小三、次女が小一、長男が二才でした。長男はお昼寝中で、長女は、たまたま早く帰れて、ちょうど家に着いたところでした。地震がおき、始めはテレビや金魚鉢をおさえていましたが、あまりの揺れと、電気が割れたので、外へ逃げました。入居三ヶ月の新居のクロスにひびが入っていくのを見て、家ごとつぶれてしまうのではないかと思いました。次女は大丈夫だろうか：学校が古く、しばらく前に外国で地震で校舎が崩れていった映像を思い出し、次女と会えるまでは不安に押しつぶされそうでした。

電気も水道も止まってしまい、その日の夜から電気だけは大丈夫だった保原の親せきの家に、三日間お世話になりました。電気があるだけでこんなにも安心できるんだと思いました。夜になって初めてテレビで津波の映像を見て、ここよりもっとひどい所があったんだと、がく然としたのを思い出します。

その頃、原発の知識はゼロです。あんなにおそろしい事になっていたのに水をくみに子供と外で並んだりしていました。二回目の爆発が起きた後、ヤバイ事が起きているのかもと不安になりました。そして、主人の兄弟の職場から避難をといた話が出て、私と子供三人、義母、おば、と女性たちで東山温泉に避難する事になりました。もちろん主人にも一緒にお願いしましたが、仕事があるからと残りました。もしかしたら、もう二度と会えなくなるかもと思いましたが、一晚考え、私は子供たちを絶対守る！離れて

もがんばろうと心に決め、会津へ向かいました。通行止めになっている道路をまわり道しながら、ガソリンも節約して寒い中、暖房を極力つけないで走りまわりました。会津での一週間は情報もないまま、この先どうなるんだろう：パパは大丈夫だろうか：そんな事ばかり考えていました。一週間経ち、義母たちも仕事で福島に戻ることになり、私は子どもたちと山形の実家へ行く事にしました。

春休み中、実家で過ごす事となりましたが、どう過ごしていたか記憶があまりありません。ただ覚えているのは、いつでも逃げられるようにジャージで一日中過ごしていた事。そして、そんな緊急事態の私とは、かけはなれた日常を過ごしている人とのあまりにもギャップがある事でした。不安はありましたが、新学期には福島へ戻る事にしました。

その頃の情報は、ほぼ、新聞、テレビでしたが、あれだけ大丈夫と言っていた飯館村が避難区域となり、次から次へと、後になって本当のことが出てくる行政、メディアへの信用は、全くもって無くなりました。そこで、まず、行政主体じゃない話を聞いてみよう！と思い六月に行われた野呂美佳さんの講演を聞きに行きました。そこで、チェルノブイリから行われている保養の話聞き、子供たちが、転校は嫌だと避難を嫌がっていたその頃、これしかない、そのまま保養の相談に行き、そこでたまたま紹介されたのが、岡山県の「わらプロジェクト」でした。

この出逢いは、まさしく私を変えた出逢いでした。放射能から逃れて岡山まで行きましたが、そこで教わった事―放射能、その前に、あなた自身が地球を汚していませんか？との問いかけは、衝撃でした。知らず知らずのうちに環境に負担をかける生活をしてい

た事、洗剤、農薬、食物、すべて自分さえ良ければ、便利で、楽ちん、という自分勝手な生活をしてきたのだなあと、そこで考えさせられました。わらプロジェクトでの生活は、あたりまえの事を、丁寧に、食事の事、生きる事、考え方、これまでの生活では気がつかなかった事を考える人生を変える一ヶ月となりました。それまでめそめそしていた自分が、ピンチをチャンスに変えるんだと思える様になりました。

夏休みが終わり、福島に戻ると、現実に戻り、そう簡単にはいかない事、本当にこのまま、ここに戻ってきて良いんだろうかと、ものすごく悩みながらの五年間でした。もちろん、他の土地への避難も考えましたが、私たち家族は、みんな一緒に暮らせる事を一番に選び、まず基本となる食生活を改め、出来る事とはかくやってみる。そして、長期休みには保養へ出す。これらを出来る限りやってきて、そして、これから又、続けていくつもりです。周囲との考えのギャップや苦しむことはたくさんありますが、新しい人とのつながりが出来、ここまでやってこれました。ものすごく視野も広がりました。

震災後、二〇一五年に次男が生まれました。正直妊娠したと分かった時は、本当に産んで大丈夫だろうか：と不安もよぎりましたが、元気に育ってくれています。これから先も考えなくてはならない事があるし、子供、そして孫の代までもこの問題は続く事になるでしょう。どうか、この辛かった経験が、ずっと先の子どもたちに同じ思いをさせない様な未来へ続く、きっかけになってくれたら、と願います。

震災が起きて、当初はライフライン確保に必死でした。その後に原発事故が起き、それまできちんと考えなかったことが起きて、緊張が走る日々でした。大丈夫なのか大丈夫じゃないのか、頭の中でずつともやもやしていました。長男は四才、次男は二才、外で遊びたい盛りの時期に外に行かせられない事もストレスでした。その当時は、ほとんどの人達は不安で、怒りでいっぱいだったと思います。その中で避難する人、しない人、悩む人々がたくさんでした。

夏の七月に避難する事を主人と話し合い、長男は幼稚園に通っていたので、かなり悩んでの決断でした。残る友達がほとんどだったので、複雑な気持ちで避難をしました。先に避難をしていたママ友達がいたので、環境や周辺に知り合いがいると聞き、主人と話し合い新潟行きを決断。私と子供二人母子避難という形で新潟へ向かいました。土地勘もわからずで、とても不安な気持ちが大きく、精神的にきつかったです。そういう状況で支えになったのは、主人が週末などに来てくれた事、友達がいた事、避難した同じ思いの福島のお母さん達と出会えた事でした。更には新潟の地元の方々やお母さん達との出会いもとても大きかったと思います。少しずつ暮らしに慣れて来て、色々な人達との交流もあり、とてもありがたい環境でした。少しずつ放射能についての知識を知れば知る程、恐怖でいっぱいになる事もありました。主人との考え方もすれ違ってしまったり、残った人たちへの罪悪感も多々ありました。皆で避難できたら：という思いをお母

さん達とよく話していました。本心を話すことが少ない分、話ができる機会をくれた方々には本当に感謝しきれません。悪いことばかりではなく、人と人とのつながりをもてたことが私の中では大きな財産となりました。

避難して新潟で暮らしたのは一年半程でした。帰るきっかけは、三人目の出産と、長男の入学でした。家族の支えがあつて今の生活があります。今は家族に感謝でいっぱいです。それでも放射能に關しての話は、あまりできる事ではありません。帰ってきてから、同じ避難したママたちとまた出会え、サークルもできてパワーをもらっています。帰ってから日々の生活に追われ、放射能から子供を守るという気持ちを忘れている自分もあります。子供たちを守りたいという気持ちは誰しも持っているはずです。子供達に将来何を残せるかを考え続けて行きたいと思っっています。

四年三ヶ月の避難体験

F・M

二〇一一年三月十一日東日本大震災発生

私は当時、夫と子ども二人（長女二歳・長男二ヶ月）の四人で伊達市梁川町のアパートに住んでいました。当時住んでいたアパートは地震で部屋の窓ガラスが割れ、足の踏み場がなくなるくらい物が散乱した。住める状態ではなかったため、私達家族はすぐに私の実家へ一時的に避難をしました。その数日後、原発事故は起きました。原発が爆発したことで、地元で採れた野菜などから基準値を超える高い放射性物質が検出された。政府が発表する避難指示の区域がどんどん拡大して連日のニュースや新聞の報道は、本当に恐怖でした。放射線が体に及ぼす危険性を知った時は、被曝するんじゃないか、もしかしたらもうしているのではないかと、不安な日々が続きました。そして、数日後には、食べ物や飲み物に気を遣うようになり、一歩も外に出られなくなりました。原発事故により、私達家族の生活と人生は一変させられてしまいました。

私はあの時、すぐにでも県外へ避難をしたいという思いがあったのですが、避難できない理由がありました。それは、長男が当時二ヶ月と生まれたばかりで、私は産後の体を休めるため、夫や実家の手助けなしには生活できなかったからです。また、当時二歳になったばかりの長女が年齢的にも手のかかる年で、初めての子育てで私はとても苦労していました。

その後、私達が住んでいたアパートへ戻ったのは四月。生活は落ち着いても、放射能に対する日々の不安は消えませんでした。外で遊ぼうとする子どもに対して色々なこと

を制限しなければならぬことが、とてもストレスに感じました。ある時、福島県内から県外へと自主避難している人がいるということを知った私達家族は、放射能から子供たちを守るため「避難」することを決断しました。ですが、幼い子どもたちのことを思うと、避難という決断は、とても勇気がいりました。父親がいない生活はどうなってしまうのだろうかという戸惑いや不安も当然ありましたが、「あの時避難していれば」と後悔するくらいなら、「避難しよう」と、夫婦で話し合った結果でした。

夫は長年勤めてきた職場を離れるわけにはいかなかったため福島へ残り、育児休暇中だった私は、仕事を辞め、子ども二人を連れて山形へ母子避難することに決めました。山形に避難を決めた理由は、週末に避難先と福島を往復する夫が通いやすい距離にあることと、緊急時にはすぐに駆けつけられるようにという理由からでした。

引越す当日は、肌寒い十一月初旬でした。高速道路を通って、山形に向かう途中の山々の景色がとても綺麗だったのをよく覚えていて、長年住み慣れた故郷がどんどん離れていくにつれて、色んな人の顔が浮かび、寂しさに襲われました。

山形へ避難して大変だったこと

避難先には親戚も知り合いも誰一人いません。頼れる人などいません。見知らぬ土地での生活を覚悟した上での自主避難でしたが、その生活は想像以上に大変でした。避難当初は、子どもが幼かったこともあり、私一人で子ども二人を連れて出歩くことは一苦労でした。また、避難当初は、定期的に寒く雪道の運転は自信がなかったため、夫が週末に帰ってきた時にだけ、必要な買い物を買わせて、しばらくはアパートでの引きこもり生活が続きました。夫以外に今日は誰とも話さなかつたという日もあり、週末に夫が

帰って来るまでの時間がとても長く感じました。大丈夫、なんとかやっていくんだと自分に言い聞かせながらも、その慣れない生活に疎外感や孤独感を感じたこともありました。

夫は、仕事があるため、土曜の朝に避難先のアパートに来て、日曜の夜か月曜の早朝には福島へまた帰ってしまう。夫が福島へ帰ってしまうと、「パパいない、パパに会いたい、パパがいい。」と、長女が必ず泣きじゃくり、つられて長男も愚図る。「ごめんね。」としか言えなかった私。

でも、本当は私も泣きたいくらいでした。毎日子どもたちに泣かれるのはどうしようもないくらい切なくて、やりきれなくて、やりきれなくて申し訳なく感じました。子どもと三人で泣いたことも沢山ありました。子どもも、私も、その時はとても辛かったです。夫が避難先のアパートに帰ってくると、私は日々の生活や子育て、色んなことから開放されたようで、安堵感でいっぱいになりました。私達夫婦は、離れていることで以前にも増してお互いがお互いのことを思いやるようになりました。一番頼りにしたい夫なのに、子どものことや些細な日常のことを話したいはずなのに、週末通いで大変だろうと思った私は、かえって夫に気を遣い、相談できなくなってしまうこともありました。

また、福島から避難をしてきたことで、周囲の目がとても気になりました。周囲に迷惑をかけまいと、まだ訳もわからずに泣いている子どもに対しても私は過敏に反応してしまっていました。初めての子育てなのにも関わらずどこか完璧でいようとしていたのでしょうか。その度に、何の為に避難をしてきたのか、自分を何度も責めたりもしました。

それが、とてもストレスでした。

それから、子どもが幼かったため、病院通いはしょっちゅうでした。子どもの具合が悪くなった時はもちろん、自分の具合が悪くなった時は特に大変でした。近くに頼れる人がいないことは分かっているけど、子ども二人のうち、どちらかが熱を出したり、具合が悪くなると、もう片方はどこも具合が悪くないのに、必ず一緒に連れて行かなくてはならず、特に夜間や雪が降った日は本当に大変だったのを今でも覚えています。

それから、自主避難をする前、私達家族は、比較的線量も低いところに住んでいたため、自主避難をする人はあまりいませんでした。夫の職場でも家族が県外に避難している人はおらず、福島で生活している夫は当時、相談をしたり情報を共有できる相手が周りにいませんでした。そのため、周囲からの理解は難しく、まだ、山形にいるのか？いつ福島に帰ってくるのか？低線量なのだから心配ない、なんてことを言われたこともあります。もしかしたら、避難していること自体が悪いのではないか？そう、思ってしまふほど、心が痛んだ時もありました。また、週末にしか子どもたちにも会うことができない夫は、子どもと離れて暮らすことで、その時その時にしか見られない子どもたちの成長を見ることができない、感じることもできないことが、とても寂しくて辛かったといえます。

仕事、そしてあいびい保育園との出会い

大変だったことばかりではありません。この頃お世話になったあいびい保育園との出会いは、私はもちろん、子どもたちにとっても避難生活の大きな支えとなったことは避難生活で一番忘れられません。園では、お母さんの声に耳を傾け、常に母子避難者であ

るお母さんや子どものことを考えてくださいました。食べ物から外遊び、お母さんの就労支援まで、何から何まで支援をしてくださいました。また、山形県内外や海外、一般の個人や団体の沢山の方々のあたたかい支援があったことも忘れません。私たち母子避難者を受け入れてくださり、二年半という長い間運営して頂いたことは、感謝してもしきれません。私は、保育園に二人を預けて、山形市内でパートで働くことができました。働くことで、外からの刺激を受けることができ、子育ての息抜きにもなりました。また、保育園や職場で、沢山のひと繋がりをもてたことが何より嬉しかったです。そして、保育園で出会った母子避難のお母さん方との出会いが、私には物凄く大きなものとなりました。夫が週末にしか山形に来ない、家族離れ離れの生活ではありましたが、同じ境遇にいるお母さんがいることで、とても救われたのです。山形での生活のことや子どももの悩み、仕事の愚痴などを話し、お互いに励まし合うことで、一人で子育てをする負担がとても軽くなりました。みんな、とても温かくて、身寄りがいない私にとって、とても心強い存在でした。震災がなかったら、避難をしていなかったら、出会わなかったであろうお世話になった園の先生や、支援をしてくださった沢山の方々、そして、同郷のお母さん達と出会えたことに、今でも心から感謝しています。

福島へ帰還

二〇一五年四月に長女は小学校へ入学、長男も幼稚園へ進級を予定していました。これを機に、山形への避難生活にピリオドを打ち、福島へ帰還、その後、今に至ります。山形での避難生活は四年三ヶ月。避難生活は、幼い子どもたちには本当に我慢させてしまったけれど、家族の絆はとても強くなりました。沢山のひととの出会いは、放射能のこ

と家族のこと、子どものこと、沢山考えさせられました。避難生活は、勉強にもなったし、今まで気づかなかった大切なことに気づかされました。沢山の出会いに感謝しています。そして、夫や福島で帰りを待っていた家族、また、幼いながらも、寂しい気持ちを我慢し、一番頑張った子どもたちには、心から感謝しています。福島に帰ってきた今、まだ放射や生活の不安は消せない部分もあるけれど、今は、家族で一緒に過ごせる時間を大切していきたいです。

二〇一六年四月から伊達市で、原発事故で自主避難した家族の支援業務に従事している。寄り添いが好きなわけでもなく、どちらかといえれば苦手である。それでも引き受けた理由がある。中国ハルビン市で四歳になった一九四五年八月九日、ソ連軍の空襲と囚人部隊と称された陸軍の突然の進攻があった。満州は、八・九を境に地獄と化したのだった。一年後に、両親の故郷山形県に逃避移住した辛い思い出があったからである。

昨年秋七十年ぶりに生まれ故郷を巡る旅が実現した。長春、ハルビンから牡丹江へ、更に生誕地近くのソ連満洲国境の開拓部落や軍事要塞をめぐるグループ旅行であった。バスで広大なトウモロコシ・大豆・高粱畑を抜ける近道道路を走るにつれ、中国の意識遺伝子が染み出す不思議な感覚があった。日本人学校の教員だった父は、数編の随想や私小説を著しており、日本人に対する略奪と強姦、男狩りと強制労働を記録している。移動中のバスで会津出身の御婦人から、彼女の母親と一緒に引揚げた岡山の女性(推定二十八歳)が書いた四十八頁に及ぶ日記風の体験手記コピーを頂戴した。父のロマン的な?短編随想とは異なり、これは本当なのか?と俄かに信じ難い出来事が、固有名詞で赤裸々に綴られていた。国境の満州里近くの街からハルビンまで逃げ惑い、引揚げ列車を待つ一年間の逃避生活記録だった。

体験手記を頂戴した御婦人の母上は、この時身重で、一行の中で最初に一歳の女兒を喪った。その後次々と十一人が息絶えていく様子が、事細かに記述してある。会社にお

ける夫の上下関係を主張する人間関係の葛藤や、現金、衣類、食糧をめぐるもめ事は、読んでいて切なさが入み上げてならない。避難生活が長引くにつれ、常軌を逸し狂人化してゆく母親の姿は、まさに地獄絵図の一コマのようだ。ソ連兵が「喉が渴いたから水をくれ」というように、見境なく女性の提供を強要する様子は、私の脳裏に今も実体験か後日の情報か判断がつかないまま、記憶の底にある。

ソ連兵進攻直後の混乱から間もなくして、日本人避難者も生活の糧を求めて、兵士や現地人相手に、日々命がけの商売を始めざるを得なくなった。驚愕したのは、ダンサーや性風俗店で働くようになった日本女性達の立ち振舞いだ。兵士や俄か富裕者の矢面に立って、体を張った対応や、女性達の衣類や化粧品を買い上げをねだる行為が数多く見られた。娼婦と天使同体の聖書絵画を見る想いである。一九四五年の暮れ頃、一歳の女兒を喪った会津に引揚げ途上の母親は、男児を出産した。体験記録を頂戴した御婦人の兄に当たる方である。

この後遅れて数人の夫が合流した母子集団は、翌年八月にハルビンから引揚げ列車に乗り、二ヶ月をかけ十月に本土上陸を果たした。ハルビンに避難滞在した女性達は、暴行の被害を持ち込まない特別秘密身上相談検査を受ける屈辱を味わった。麻袋を着て空き缶が持ち物という、裸同然の集団もあつたという。私達親子も同じ時期に同じ行程で、山形県に避難移住した。子供三人にとっては、異国である。直後に一歳になった弟は、あつけなく他界した。今年九十八歳の母は、未だ彼の地の出来事を語ろうとしない。

あの悲惨な敗戦体験から六十六年後に、私達は東日本大震災と原発事故の大試練に遭

遇した。いま原発事故から自主避難した母親達の体験手記を読んで、思う喜びがある。それは今の日本人が、自分を調御し、隣人と支え合い、試練と混乱を乗り越えるために、協働力を向上させたという明らかなる成長ぶりである。

欲望と期待、思惑と憶測が行き交うこの世界。未熟と不足を抱える人間には、葛藤と争いは避けられない。いまこの大試練を乗り越え、新しい時代社会を創生していくために、私達はもつともつと日本人の心の傾向や習慣力を見破る智恵が必要である。

帰還者家族と関わり、超えなければならぬ未熟さが見えてきた。それは新しい繋がりを求めるのに、「面倒臭がる怠け心」が根強くあること。もつと難しいのが、相手の側に立ち「寄り添う」という具体的な対応が出来ないことである。

（NPO法人りょうぜん里山がっこう職員）

編集を終えて

試練にであったとき、家族や地域は、事態の認識と解決策をめぐって、価値観の違いによる対立と分断の傾向が強まる。福島原発事故によって、子育て家族は子供のいのちと生計を守るため、残留か自主避難かの苦渋の決断を余儀なくされた。子育て家族は、人口減少社会の鍵を握る大切な世代である。その決断は地域社会の将来に影を落とす。

この記録には、行政や専門家の発信する情報が錯綜する中、何を信じ、何を大切にしたら良いのか？避難者たちの心の葛藤と子育ての悩みが綴られている。通信技術が発達した現代でも、家庭分散を選択した避難家族の苦しみがなかなか伝わり難いもどかしさを感じる。私達の側から、避難家族の心情を汲み取り、その想いを地域づくりの宝とする姿勢が望まれることを痛感した。

あとリエとおの渡辺智教さんには、絵画ワークショップのほか、表紙絵の使用快諾と自作詩を投稿下さり、輝きを添えて頂いてこと心から感謝申し上げます。

半田節彦

皆さんが書いて下さった避難体験記録。それぞれの思いが沢山詰まった時代の宝物だと思います。入力・編集・校正・何度読んでも涙が出てしまい困りました。文章の力はこんなにも人の心に響くことを思い出させてくれました。震災事故があったあの時から、それぞれ悩み、不安と戦い、自ら下した決断に苦しみながら過ごした期間を、有意義なものに変えることが出来た勇気を、私は改めて尊敬します。震災から六年経過した今だからこそ、振り返る意味も深いのではないのでしょうか。「語る勇氣」は「残す」ことに繋がります。

最後になりましたが、優しい表紙絵を提供して下さいました、とおのさんをはじめ、執筆にご協力頂いた皆様方、お忙しい中ご協力頂き有難うございました。

高橋 寛子

東日本大震災から、今年で六年目になります。伊達もんもの家で、あの時の辛かったこと、気づかされた事など、頭の中の記憶を記録に残そうという話が提案されました。協力してくれる方を探すことから始めました。目標十五人。なかなか最後の数名の方が見つからず大変でした。協力して頂いた方々から頂いた原稿を読んでもみると、それぞれの思いが詰まっている文章ばかりで、涙目になりながら読ませて頂きました。一人、一人、震災・原発への思いは違いますが、「大切な我が子」を守りたいという強い気持ち

ちは一緒だと改めて感じさせられました。

夫婦との絆、親子との絆を感じられる体験記となりました。記録に残すことで、将来、子どもたちにこんなことがあったんだよ、お父さんもお母さんも家族みんな大変な思いをしたことがあったんだよと、親子で読み返し伝えていけたらいいなと思います。最後になります。親子の優しい表情あふれる表紙を作成して頂いた、あとりえとおのさんはじめ、体験記にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございます。

鈴木 志保

震災から六年が過ぎ、私達は日常を取り戻しつつあります。しかし、甲状腺検査やWBC、ガラスバッチ、学校や公共施設の放射能測定器、堆積する除染廃棄物、子供屋内遊技場等、原発事故により変わってしまった日常もあります。

ある人が言っていた言葉が忘れられません。『当たり前でないことが当たり前になるのかな』原発事故前は当たり前だった外遊びや山や川での自然体験は失われたままです。避難体験記に協力頂いた方々は、変わってしまった福島の日常を精一杯前に向かって歩み続けています。避難の記憶は楽しい事ばかりでなく辛い悲しい事も沢山あった筈です。それでもなお記録に残す勇氣と希望を持って進み続ける皆さんの姿に勇氣を頂き、深い尊敬の念を抱きます。素敵な表紙を描いてくれたあとりえとおのさんにも深く感謝します。ご協力頂いた皆様ありがとうございます。

佐藤 真由美